

極楽欺偽 講演の一節

人間久遠の迷執

まことに人間の久遠の迷執に深く想いをひそめる時、徹頭徹尾、人間の心は、利益にならねば舌一枚出すのがたいぎだという根性を持っています。この自性こそかくまでもと人の世を汚し、争闘をおこす根源であります。私どもの内には常にこの声が聞えます。日夜人々が営々として働くのもそれであり、裁判庭に争うのもそれであり、得がとりたい、損がしたくない。たとえ一銭でも損とならば承知が出来ないというのであります。

世間には数多の宗教が存在します。多くはこの人間の本性に迎合するために造られてあります。祈祷教の大部分がそれであり、そうしてそれらの宗教は大部分が迷心であります。

人間の数は段々と増して来ます。一寸油断すれば、食うことさえ因難になる今の世では、人の心は日に日に荒んで来ます。支那のゴビの大沙漠を思うような血もない涙もない人々の心は、全く味気ないものになって来ます。人の心が利益打算に走れば走るだけ、そうした荒んだ味気ない心になります。

信仰に感ずる心は一切に感ずる心であります。荒んだ、涙も血もない砂原のような心の中に、慈悲の泉がわき出すことでもあります。

金を通して

多くの学生たちが都会に出て勉強していますが、その大部分は学資金をもらっています。けれども学生たちの大方は金を受け取っているだけであります。金がなくてはたちませんから金のみを受け取ってそれを使っています。けれども金を取つても金以外に金の中にある、ある大切なものを見失っています。まだ金以外に受け取らねばならぬものがあります。金以外に受け取らねばならぬものとは何でしょうか。

貧しい父は雪の中をあちこちと車をひいて働いています。破れた着物に草鞋をはいて雪の道を働いているのは都の子供に学資を送らんためであります。母は寒い朝にもかかわらず、火の気のない仕事場で筵むしろを織っています。こうして日々に儲けるわずかなる金も都会の子供のもとに集めては送られます。

都会にいる青年は、来る月も来る月も何の考えもなく親のもとへ学資の催促をします。一円で多ければ喜ぶかわりに一円でも少ければ散々にやかましいことを故郷に言つて送ります。月々のお金は何の感激もなく、感謝もなくサッサと使われて行きます。故郷の両親が毎夜毎夜大根煮に麦飯で舌鼓打っているのにひきかえて、都会の学生は毎夜、うどん屋に入り、洋食を食わねば寝られぬくせがついてしまいました。かくして数年はたちます。青年は成長します。学問は進んでも彼はついに人ではないのであります。彼は金を受け取つただけで金の中にある金以上のものをば見失っているのです。

人間の物の考え方が権利と義務でしかなかった時、親は金を送るべき義務を有し、子供は金を受け取るべき権利を有するのだとの考えのみになった時、人生のどこ

にうるおいがありましよう。けれどもそうした世界を超えた第三世界がなくてはなりません。人の世の涙、人類十数億の内、唯一人でも、胸に涙のうるおいがある間、権利義務だけの、二二が四と割り出して、それきりしか何の味も香りもない世界だけではすみません。学生にたづねて見ます。

「その金が使えぬか。その金が使えぬか。君はまだ、その上足らぬ足らぬと父親にねだる考えなのか。使つてもいいけれどもその金を使う前に、君は知らねばならぬことがある。その金は単に義務の考えや権利の理論からは生れて来なかつたのだ。その金を通して君の故郷の空をのぞいたがよい。見よ父上は雪の中を走っているではないか。その足は寒冷に凍え、荒れたその手には血がにじんでいるではないか。塩辛いお漬物に麦飯のお茶漬けがその昼食である。米の残りを売った金も、柿を売った金もそれが全部、この為替一枚に凝っているのだ。君はまだ、金が足らぬと言うか。敷島煙草、絹足袋、洋食、菓子、煮着の弁当、活動写真等、君は一度、君の周囲を見つめる必要はないのか。」

彼ははじめて合掌しました。彼は金以上のものを得たのだ。人間全体の裏を綴る無形のある力にふれたのです。一点の光が心頭にかがやく時、そこに照し出される姿は不孝者であります。彼の青年はあまりにもみじめな不孝者たる自分のあさましさに泣いたのである。乾ききつた彼の心の内にも暖い泉はふき出した。彼の不幸者の親たちは、貧しい夜の床の上にも街なる息子を忘れる時はありません。その計算を超越したる親たちは今、はじめて、彼の不幸者なる青年の胸底に生きて来たのです。彼の青年の全身心は彼の親たちの慈悲の結晶であり、彼の全生涯は、念々の親の慈悲によつて創造されているのであります。

彼の青年は不孝に目覚めて慈悲に生きていたのであります。彼のその全霊は何者かに燃え上り、起上る力は彼のものとなつた。彼の前途は光であり、彼の生活は精進努力にかわつて行つた。

救われた者の肩は軽く、その現実には光に充ち、万象は光明に輝く。而して彼の乾いた胸にはうるおいが出来る。

道を求めようというのか

儲けをしようというのか

田舎で何かにぎやかな催しがある時には、余興に餅まきが行われます。高い所から餅が播かれると、群衆は恐しい勢いでそれをひらい取る。人をつきとばす、おし倒す。腰のまがつたお婆さんまでが飛び出してはねとばされる。人間の赤裸々な様が見られます。

その醜い嫌な欲深い心を無限にのぼして見る。

小さい時から、死んだ先は地獄だと聞かされ、極楽だと聞かされた。死の彼方には楽しみ極りないという極楽世界と、永劫に熱鉄の湯玉の煮えたぎり、紅蓮の炎の燃えあがるという無間大地獄とが見える。地獄と極楽、右に行こうか左に行こうか、ここに人間の心の動きがはじまる。どうしたら地獄をのがれて極楽に行けるか。極楽に行きたい、何という大きな野心であろうか。功利心でしようか。

どうしたら極楽に行けるか。答えて曰く、信心一つで参られる。曰く、安心さえしたらよろしい。曰く、おすがりすればよろしい。曰く、たのみさえすればよい。曰く、よろこばしてもらいさえすればよい。欲には目のない連中が、どうしたら信心になれるか、どうすれば安心が出来るか、どうしたのがすがったのか、どうしたのめばいいのか、私はよろこばれぬがどうしようかと、心をやつして極楽参りをにぎりにかかります。大それた盗人です。荒んだ大山師です。

これが果して浄土真宗であろうか。
聖親鷲の足跡であろうか。
大聖世尊の遺教であろうか。

寺詣でのついでに新しい下駄をもつてかえる者がおる。話が始まると居眠りをはじめめる。緊張を欠いだいわる同行が、芝居見物や落語を聞く気で寺にまいる。年老った人たちは、益々本気でお浄土参りの確な証拠をつかもうとする。かくして、寺院の空気は現実の嫌な有様になつてしまいました。
休めよ。止めよ。集まれる数百人の内、唯一人真剣に道を求めんとする者はないのか。

求道

大無量寿経に曰く

「仮使仏有りて 百千億万無量の 大聖 数恒沙の如くならんに 一切斯等の諸仏を 供養せんより 如かず道を求めて 豎正にして卻かざらんには」と。

大聖世尊の出世の本懐は「道教」にあるのです。「道を求めて」そこに高い宗教の天地は開いているのであります。

道を求めるとは自分の道を求めるのです。道を求める者は自己を知らねばならぬ。自らを徹底的に知ることを我が宗では「機の深信」といいます。機の深信とは単に自分に地獄行きだとのレッテルをはりつけてほつてしまうことではないので、仏眼が開け、心眼が開けて、自らの心の畑を念々に掘りかえして行くことなのです。道は「汝自身を知る」ことからはじまります。自己自身を知る光を智慧といい、仏智というのであります。

果して自分たちは何をして暮しているか。金でなかつたら、名誉、名誉でなければ地位、地位に非ずんば愛慾、他人をしのぎ、世を欺き、荒んだ狼のような眼をして昨日もすぎ、今日も暮れる。かくして一日の慈善もなければ、奉仕もない。かかる自分がこの上更に極楽をつかもうとするのです。目覚めねばなりません。

この上まで自分の考えで極楽に行きたいと思うのか。人間のああして、こうしてというはからは全部間違つていっているのです。三百六十五日を全部、貪欲に使つてしまつて、曾て一善をはげんだことなく、一行を積んだおぼえない悪人が、まだ荒んだ心と、食欲の手をのぼして、お浄土参りをつかもうとするのです。身の程を知つたがよい。まいられぬ、行かれぬ。永劫の地獄者の上に、慈悲のみ手はさしのべられてあるのです。仏から私へ動きたもうみ心を菩提心といいます。私から仏への菩提心ではないのであります。

方便から真実へ

真暗な闇の夜、雨は篠つくように降る。牢の中に囚れた一人の悪漢（その名を権蔵と言っておこう）権蔵は、牢を破つて逃げ出そうとする。役人どもがバラバラとあらわれて格闘がはじまる。権蔵は牢番の士どもを斬つて大雨の中を逃げる。権の妹お花は芸者である。身を憂き川だけに沈めて、来る日来る日をはかなみつつ、すすまぬ心で客のつとめをせねばならぬ。金のいくらでもある美濃屋の若主人は、お花の色香にまよつて、日も夜も酒にひたり、金にあかせて大盡ぶりを見せる。金の力で、お花を一度は我がものにしよつとす。けれども金の力で人の心は動かぬ。お花は女将に酷い責苦にあわされても、確く貞操を守つて動かぬ。まことに貞操は女の命、泥土に咲くお花は、たとえ殺されても愛なき男のためにむぎむぎ女を失おうとはせぬ。そうして美濃屋は益々お花に執着してどうにかして、お花の心を動かそうとする。お花にとつては苦しい日が毎日続く。

ある日兄の権蔵があわただしく走つてお花のいる芸者屋に来る。その夜は即ち牢を破つた日である。今しばらく兄をかくまつてくれとたのむ。すぐ捕手たちはこの家にかけて再び役人と権蔵との間にはげしい争闘がはじまる。捕えられんとする権蔵にお花が三味のバチをなげつてやると、権蔵はバチをとりあげてそれで捕手たちを散々傷つけてまたも逃げ出す。

ある日である。川には舟が一隻浮んでそれには例の美濃屋が、芸者を沢山のせて物見遊山に出かけている。お花もちろんその中にいる。岸に舟がつくと松林の間を4彼ら一同は浮かれ通つて行く。その時である。一行から少しおくれた、お花が誰にかよびとめられるので、ふりかえつて見ると、そこには権蔵が立っている。権蔵はおそろしい剣幕でお花に言った。「おいお花、すまんがお金を五十両出せ。俺も今日まで悪業で通つて来たがもうこれからは真人間にかえりたいと思う。けれども世の中の人間どもは俺を相手にしないのだ。金の五十両もあれば、それをもとに真人間にかえるのだ。」とは言うが権蔵の顔にはちつとも真人間らしい血の気は見えぬ。お花は困っている。権蔵はなおもお花に責めかかる。この有様を皆で見ていた美濃屋は、女将をよんで金を紙に包んで渡すと、女将はそれを権蔵にやつた。彼は、卑しい笑みを浮べてペコペコ頭を下げて懐に入れようとしたその時である。お花は兄権蔵の胸に顔をうづめて、

「兄さん！ 兄さんはそのお金をとるのですか。ああ私は今日限り生ける屍になるのです。お花が兄さんのために差上げるこれが最後のものであります。妹が兄さんのおためになるのはこれが最後であります。女の誇りも棄てて今日から私は生ける屍にかかります。兄様後生です。どうか真人間になつて下さい、一生のお願いです。」言々句々お花の言葉は権蔵の肺腑をついた。権蔵の顔は刻々かわつた。目からは涙さえ流れて「お花！ 悪かつた。ゆるしてくれ。俺の夢は覚めた。金がなくては善人になれないというのはそれはまちがいだ！ ああおれは悪人だつた。花！ 妹の貞操を売らしてその金が何で俺に使われようぞ！」彼権蔵の全霊に火はつけられた。彼は救われたのだ。彼と彼女との間におかれたる五十両の金を通して、二人の間

には目にも見えず、形もないあるものが雷のように通つたのだ。その刹那、兄が妹か、妹が兄か、二人の心は高く光明の天地に一つにとろけあつて、善人もなけねば悪人もない。信じたも、わかつたも、懺悔も、悔改めも、たのむも、一切の議論とはからいと言葉と、そんなものが一つも役立たない世界に生れたのだ。彼権蔵の心はついに、心の故郷にかへつたのだ………いくらかの年月がたつた。一人の尊らしい行脚僧が、桜散る山寺の階を下りていた。それが昔の権蔵であつた。(これは何でもない活動写真のある場面である。)

極楽欺偽をやめよ

「地獄行きでございます」と言つてもそれはただ言葉の上である。「善人になるから」と権蔵が言つたのも金を得たいためであつた。どうしたら自分の罪深さに目覚めることが出来るか。それもやがて信心という結果を得て、これでこれだと極楽参りになりたいためである。絶対他力も飽くほど聞き、悪人正機も承知の上で罪深き自分には目覚めることもなく、どうしたら信仰か、どうしたら安心か、信心かと心をやつしている様は何という浅ましい姿でありましょうか。

妹がどうなろうと、貞操を売つた五十両を血も涙もなく懐にねじ込んで我ものがおにしようとするのか。

南無阿弥陀仏の五十両、どうしたら我がものかと、横取りせんために、貪欲の眼を光らして思案する前に、目覚めようではないか。まことに我等の罪濁煩惱が、無間の炎と燃えあがる火の中に立ちたもうて、五劫永劫果しなく叫びたもうみ親、南無六字を成就せんために、雄々しくも一切衆生海に身を投じたまいし法蔵が、かくまで貪慾に、かくまで迷える我等がために、永劫の救主として立ち上りたまいし慈悲に徹底せずして、目覚めずして、小細工を弄するとは何事であろうか。

信心とか、安心とか、信仰とか、たのむとか、まかすとか、そんな言葉に囚れてはなりません。一切をなげ出そうではないか。一切の求めてを棄ててただ聞こうではありませんか。如来は現に生きて働きたもうてあるではないか。無始の罪惡に目覚めようではないか。如来は悪人正機とよびたもうてあります。

如来は、我と一体であります。まいりたい、はつきりしたい、そんなはからいが全部棄つて、久遠の私に目覚めさせられた時、如来の全部は我がものであります。

お慈悲盜賊をやめよ、極楽欺偽をやめよ。否、我等は、お慈悲盜賊であり、極楽欺偽であつたことに目覚めねばなりません。

光の中に

廻向懺悔の朝は清い。

見よ万象は光明に輝いているではありませんか。

三千大千世界に充ち満ちたまえる尽十方無碍の光、

我等はすでにこの光の中に摂取されているではありませんか。

我手の一つあぐるに先立ちて如来もまた手をあげたまい、

我、畑に耕す時、如来も亦その背後に立ちたまいてあるではないか。

我等が病める友の看護する時、如来も亦そこにいたものであります。

はからいなき世界

母のつくりたまひし晴衣一枚、それは我ものである。けれども、衣服だけを着てはならぬ。衣服はこれ母の愛の結晶、内に燃える真実が形に表れた方便である。方便を通じて真実を見ます。

南無阿弥陀仏の六字の晴衣を横取りせんとすればするほど、我が心は荒む。横取りするより先に、如来の胸中の久遠の秘密、悪人正機の絶対慈悲にふれねばなりません。慈悲にふれた者は、晴衣の品が絹か木綿かの詮索はいたしません。

「念仏はまことに浄土に生るるたねにてやはんべらん、また地獄に墮つべき業にてやはんべらん、総じてもて存知せざるなり。たとひ法然上人に賺されまいらせて念しかして地獄に墮ちたりともさらに後悔すべからず。」

かくまで、大手がひろげられて、我が全部を本願一つにまかせた時、不思議にも、「弥陀の五劫思惟の願をよくよく案ずればひとへに親鸞一人がためなりけり。」と全部は我がための御慈悲と知られるのであります。

○金がないことに目覚めて、金をつくろうと辛苦するのが十九願です。

○金だけ貰って我がものがおにしているのが二十願のにおいであります。

○金を通してお慈悲にふれたのが十八願です。

今日はこれでおきます。